

「天から啓示されたやまじ」

ルカ5：12-16

(1)

今朝は、「ライイ病の男」と主イエスとの出会いの箇所です。「ライイ病」を、「新改訳」第三版では「フライ語の」「ツアラアト」としてました。「新共同訳」は、「重い皮膚病」「、これでは、かなりイメージが異なります。一般には「ハンセン氏病」ということです。

1941年(昭和16年)アメリカの医師「カイ・ハンリー・ファジエット」が、結核の治療薬「プロミン」を、ハンセン病患者に投与してみたところ、著しい効果がありライイ病は治る病となりました。

「ライイ病」「ツアラアト」は、「神に鞭うたれる」「・悪魔に懲らしめられる」という意味が背後にあるようです。日本では神社に近づくと、手を洗い、口を注ぎ、世俗のチリをばらう、それから本殿に近づくと習慣があります。「ライイ病」は、そうした「汚れ」と深く関係しています。

5章17節以下に、中風の病の者が、「いざや来た」とありますが、それは対照的にライイ病の男は、「いざや来た」といいます。(註記13章—14章)。

「ライイ病」は体の汚れだけではない、神の御前にけがれた者「と見なされてしまっていたから、イヌラエルの共同体から排除され、宿営の外に隔離され、神殿礼拝に近づくと許されませんで

きた」「、ライイの者が一般社会に踏み込まないよう、衣の裾に鈴をつけ、音を鳴らし、口ひげでおおいながら、自らが「汚れた者です、汚れた者です」と呼ばわらねばならぬ」「(1)」「(13：45)と定められていました。

ルカ5章12節には、「さて、イエスがある町におられたとき、全身ライイ病の人がいた。イエスを見ると、ひれ伏してお願いした。『主よ。お心ひとつで、わたしをきまわしてください。』」ただ「ライイ病の男がいきなり町中に現れました。おそろしく、群衆から石を投げられるかもしれない恐れながら、主イエスに近づいたようです。しかし、主イエスは、近づいてきた男の患部に手を触れ、ライイ病をきよめたということです。

し(註記14章1節以下を見ますと、ライイ病がきよめられる手続きが記されています。先ず、祭司が町の外で、ライイ病であるかどうかを診察します。仮に、「きよめられた」と祭司が認定しますと、罪をあがなうため、祭壇に供え物を献げる習慣がありました。

ルカ福音書5章14節に、主イエスも、し(註記と同じこと)を、この男に指示しております。「ただ祭司のところに行って、自分を見せなさい。そして人々へのあかしのため、モーセが命じたように、あなたのきよめの供え物となれ」。

(2)

日本におけるライイ病に罹った者の扱いは、本人は勿論、家族・親戚縁者にまでその累が

及び、周囲から忌まわしい目で見られました。

ライイ病は、別名「天刑病」という忌まわしい名前が付けられていました。以前、日本にはライイ患者を収容する「国立ライイ療養所」が13箇所ありました。「世のあらゆる苦悩が集積した場所」と人々から恐れられ、厳しい隔離政策がとられ、戸籍原簿からその名が抹消され、断種を命じられ、結婚することまで禁じられました。つい最近です、このことが裁判沙汰になり、国は賠償金を支払うことになりました。

「ライイ病」と一口でいいますが、ライイ病は地域によって事情が異なります。そのことを沖縄で初めて知りました。聖書でいうライイ病と、アジア圏のインドや沖縄におけるライイ病とは種類が違つていいます。ライイ病の世界分布図があります。そこには、南半球に多く、不思議とヨーロッパ社会には少ないのです。ライイ発症の根本の原因は、貧しさからくる栄養失調にあるといえます。特に、沖縄でいえば、石垣とか、八重山に発症率が多かつたといえます。

ライイ病と分かつた者は、自殺を企てます。しかし、人は死のつと決心して死ぬるものではありません。痛ましいことは、わが子がライイと分かつると、わが子の行く末が不憫でならないと思ひ、わが子に手をかけ自分も死のつと決心した親が少なくなつてきます。

今日、ライイ病は、医学的に治療が可能となりました。しかし、偏見や差別はいまだ根本的

には解決しておりません。

ところで、全身ライイ病の男が、主イエスの前に突然にあらわれ、「主よ。お心一つで、わたしをきよくしていただけます」と地面に顔を擦り付けながら願ひ出たのです。その必死な願ひに、主イエスは「手を伸ばして彼の患部にさわりの、わたしの心だ。きよくなれ。」と申しました。これには、群衆も、弟子たちも、驚きあきれたのではないのでしょうか。

ライイ病の者に触れることは、当時絶対の「タブー」とされていました。なかでも、祭司・レビ人などは絶対に許されていません。しかし、主イエスは、全身ライイ病の男の患部に直に触れ、「わたしの心だ。きよくなれ」と申しました。

主イエスは、もしかしたら、ライイ病は手で触るくらいでは伝染しないことを知っていたとでもいうのでしょうか。いいえ、知らなかつたはずですが、それでも、これは、医学の問題ではありません。問われているのはライイ病の者に対する「あわれみ」・「いつつてみ」

「愛」の問題ではないのでしょうか。世間から忌み嫌われていたライイ者に主イエスの手が及びました。「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します」①ヨハネ4：18とあります。主イエスは、ライイ病の男に手を触れ、ライイ者に対する偏見を打ち破つておりました。

キリスト教会二千年の歩みを省みますと、ライイ者の問題と積極的に取り組んできました。

ハワイのモロカイ島において18世紀半ば、当時誰も顧みなかったハンセン病患者たちのケアに生涯を捧げ、自らもハンセン病で命を落とした、タミアン神父の話は余りにも有名です。

沖縄本島の北東部の今帰仁村に、ライの施設「沖縄愛楽園」があります。記念の石碑には「青木恵哉」の名があります。昭和13年に周辺住民の偏見と闘いながら建て上げた施設です。わたしは、沖縄を訪れた方を愛楽園までたびたび案内しました。現在の「愛楽園」の雰囲気はのどかですが、それ以前に宮古や八重山諸島から、「愛楽園」につれてこられたライ者の方々のことをお聞きしますと胸の痛みを覚えます。

実は、この施設を建てた「青木恵哉」もまた、ライ者でありました。徳島に生まれましたが16歳の時、発病しています。19歳の時に、アメリカの宣教師「エリクスン」と劇的な出会いがあり、彼から洗礼を受けております。「神から刑罰を受けたやまい」といわれた病を通して、天の窓が開かれ、彼の内に喜びの大輪の花が咲きました。その時から、ライ病は、彼にとって、もはや、「天刑病」ではなく、「天啓病」ー、即ち「天から神を啓示された病」となったのです。

旧約聖書の「ヨブ記」の主人公「ヨブ」もまた「重い皮膚病」を患った人です。「足の裏から頭の頂まで、悪性の腫物でおおわれました」(ヨブ記2:7) そうした失意・絶望の

底から、神のいつくしみと愛とが如何に絶大なものであるかが示され、ついに、深き淵より、「主よ」と呼ばわったのが「ヨブ記」の主人公ヨブでした。そう言えば、「ナアマン将軍」も、ライという病を通して神に目が開かれた人物でした。生きるか死ぬかというギリギリに、わが身が置かれてみまさんと、自分を贖い出して下さるお方を真剣に見つめようとしないうちにも死ななせん。全身ライにおかされていた彼は、身を投げだして主イエスに近づきました。主イエスもまた、それに応じました。

(3)

釜山から100<sup>+</sup>ほど離れたところに「麗水」(ヨルス)という町があります。そこにライ者の施設があります。その施設内に、「愛養園教会」があります。毎日午前10時にはライ者たちが集い、礼拝が始まります。その施設の責任者は「孫良源牧師」でした。彼のライ患者と向かい合う姿勢は、常識を超えていました。そのことから、何と映画にまでなりました。映画のタイトルは、これまた、何と「愛の原子爆弾」ー、決してオーバーではありません。キリストの愛の迫り来るを常に覚え、あらゆる「バリアー」、障壁・障壁を乗り越えながら患者に接する彼の姿は、まさに「原子爆弾」としか言いようがありませんでした。孫良源牧師の祈りはこうです。。

「主よ、私に愛養園を心から愛せる愛をください。主が彼らを愛するのと同じ愛をわたし

にもくんださい。彼らは世の中から捨てられた者たちです。親や兄弟の愛を受けられない者たちです。世の中のすべての人々がみな、彼らを嫌って避ける者たちです。おお、主よ、それでも、私は彼らを心から愛することができるといってくださる」

「おお、主よ、私の残された人生が、あと何年か分かります。しかし、主にお委ねしたこの身と心をもって、この愛養園を心から愛することが出来ますように」「ー、こうした孫良源牧師の祈りによって、千余りの患者たちはキリストの愛に導かれました。

軽度のライ患者だけでなく、全身が崩れかけていた重症患者だけを集めた「14号室」にも入りをしたといえます。「ライ」というだけで、住み慣れた家から追われ、家族の者から完全に遮断された彼らですが、次第に、御国の福音を熱心に伝える伝道者・孫牧師に耳を傾けるようになりました。

職員たちの多くは、患者に接する時、白い手袋をはめる習慣がありました。しかし、孫牧師は、彼らと直に握手し、食事も彼らと一緒にしました。米国の宣教師から、ライの病菌は血液を通して伝染すると聞いていたからともいわれています。しかしそうと分かっていたても、なかなか出来るものではありませぬ。

日本では、ライと深く関係した「神谷業患子さん」がおります。彼女は、美智子皇后が40歳頃、全身帯状疱疹となり、ひどく病んだ時のカウンセラーでした。

その神谷さんが、二十歳の時、(昭和18年)岡山県瀬戸内にある国立療養所長島愛生園を訪れた時、はじめてライの患者を見て驚きます。鼻のつぶれた者・目のつぶれた者・耳のもげた者・皮膚の垂れさがっている者をまともに見ることが出来ません。思わず、目をそむけたくなります。わたしたちなら、何を感じ・何を考え・どう思うのでしょうか。何と世にも不遇な・不幸な人たち、何でこんな悲惨な、過酷な運命を担わされたのか・・・、それが自分でなくてよかった・・・、と胸を撫下ろすのでしょうか。

当時、二十歳にもならない神谷さんは、これとはまるで違う受け止め方をしました。こうした感性は、年齢・性別・学問あるなし、には関係のないものかもしれません。彼女がライの患者と接した時のことを詩として残されております。「どうしてこのわたくしではなく、あなたなのか？ あなたは、わたしに代わってくださったのだ」という短い詩です。「あなたは、わたしに代わって下さったのだ。そうとしか思えない。どうしてこのわたしがライでなくて、あなたがライとなったのか」と問いつつも、ついに示されたのは、「あなたわたしは身代りとなってくださった」と受け止めたのです。

神谷さんは若い時からキリスト教信仰を持っていました。「キリストの十字架は、わたしの罪の身代りである」と信じていました。それだけで、ライ者と接して、「わたしの身代り」

とどういふことを直ぐに示されたのかもいれませ  
ん。しかし、理由はどのであれ、こうしたラ  
イ者に対するいたわり深い眼差しは、主イエ  
スからいただいたものに違ひありません。

あまりにも不運な、あまりにも不運な、過酷  
な運命を負っている人と出会った時、主イエ  
スのライの男を見つめられた眼差しを持って  
接することができればと思います。」わたし  
の目には、あなたは高価で尊い。わたしはあな  
たを愛している。「1コリ4:13」。この  
天の御父の眼差しをもって見つめ直したいも  
のですね。

神谷さんは、後に、「長島愛生園」の精神科の  
医者となりました。彼女の願いは、単なるお  
とめの祈りではなかったのです。

「汚れた者」「汚れた者」と周りの者に自ら  
触れ回り、生けるしかばねであることを公言  
していたライの者に、主イエスは近づき、  
患部に手を触れた時、ライ病はきよめらわれ  
ました。

そして、わたしは、わが身に何らかの「汚  
れ」を感じてこそ、あなたに、御手を置いて、  
きよめていただく必要がないのです。」主イエ  
スの血が、すべての罪からわたしたちをきよ  
めいただくには、①「ヨハネ1:7」との確かな  
約束があります。

最後に、この男に向き、主イエスは、「この  
人はただわたしに話しかけただけで、命を  
救った。それから、主イエスは、二人淋しく  
して、神を信じて、わたしたちの神を信じて

ところが、そこからイエスの評判はますます  
周囲に広まりはじめました。今朝は、ここま  
ででございます。

【祈ります】

天のお父さま、イエス・キリストは、「わたし  
たちが「弱かった時」「罪人であった時」「不  
敏であった時」「神に敵対していた時」、わた  
したちのために死んでくださったことにより、  
わたしたちに対する愛を示してください。主  
イエス・キリストの名により祈ります。」アーメ  
ン。